くるわけですよ。下田町のあたりから、大町や小桜町の田んぼのあたりまでね。何しろ一面水だからこんな事が出来たわけです。すのこ橋を越えましてね。そして自分の畑までくると、又竹をさしておく。するとそのうち水が引いて、水の下の田んぼが現われると、うき間がその上にのっかって、わずかづつですが土地が高くなる。とこういうわけです。うき間全体が土に変ったり、肥料になったりしたわけです。だから当時の百姓は大変でしたよ。全く今の人達には想像も出来ない苦労でしたよ。

秋水が出るのは桜川の土堤が低いせいもありましたが利根の水が逆流して霞ケ浦の水位が高くなるからでもありました。

ところで低い田んぼを高くする方法にはこの他にもうひとつ「しっぴき」というのがありました。これは実にまわりくどい方法なんですがご説明申し上げますとね、まず泥田のそっち　こっちに「みよ」という二間巾位の溝を堀るわけです。百姓が。そうすると秋水が出て、田んぼに水がかぶって、冬になると水が引く。そうすると田んぼは現われるけれども、溝の中には泥水がたまっているわけです。そしてその溝の中に実にたくさんの魚が居たんですね。当時は化学肥料も農薬もありませんでしたから。そこでこの魚を取るためにそっちこっちから多勢の人が来るわけです。酒井村とか高津とか、とに角土浦の近村から多勢の人が冬の食料と収入を得るためにやってきたわけですよ。寒三十日は仕事がないといわれまして、昔、冬は職人に仕事がなかったんですね。それで魚を取ってきて、それを自分で食べたり売ったりしたわけです。そしてこの魚を取る方法が「しっぴき」なんです。

これは、二間位の竹の柄の先に篠で編んで作ったかごのようなものがついていて（後になって金物で出来たものも現われましたが）これを溝の中の泥水の中に入れて力をこめて引くと、泥の中にずくっていた魚が泥と一緒に入ってくるわけです。こんな方法でもずいぶん捕れたんですよ。何故投網とか他の方法を使わなかったかというと、当時は皆んな貧しくて、網を買えるような人は少なかった。そして釣りをするよりはずっと「しっぴき」の方がとれたんです。この道具を持つて行ってすくえば